

訂正中等國語讀本

落合直文編

卷二

4a  
810  
明39

41607

教科書文庫

4  
810  
41-1906  
20000  
65474

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

42  
810  
明39

再訂中等國語讀本 卷二目次

一、汽車の旅……………一

二、秋四章……………五

    一、微雨……………五

    二、彼岸……………六

    三、黄昏……………六

    四、暮秋……………七

三、月見に友を招く書……………八

四、英雄の心事……………九

再訂中等國語讀本卷二目次



五、ビスマルクの幼時……………一二

六、亞米利加行の話……………二二

七、外國人の勤勉……………二七

八、クルップ鐵工場その一……………三二

九、クルップ鐵工場その二……………三七

一〇、余が劍術の修業……………四〇

一一、勸學(新體詩)……………四三

一二、一壺千金……………四四

一三、貨幣……………四六

一四、國民の義務……………四九

一五、臺灣日記……………五三

一六、威海衛の陷落その一……………六〇

一七、威海衛の陷落その二……………六八

一八、海外の一知己……………七三

一九、艦上より人に報ずる書……………八二

二〇、瀬戸内海……………八五

二一、土地と植物……………八九

二二、寶石……………九五

二三、獅子……………一〇一

二四、動物の保護色……………一〇八

二五、諭言五則……………一一一

二六、春の朝(新體詩)……………一二四

二七、ベルナルド、パリッシー……………一二五

二八、新聞紙の初期……………一二三

二九、塙檢校保己一……………一二八

三〇、活版の由來……………一三三

卷二目次終

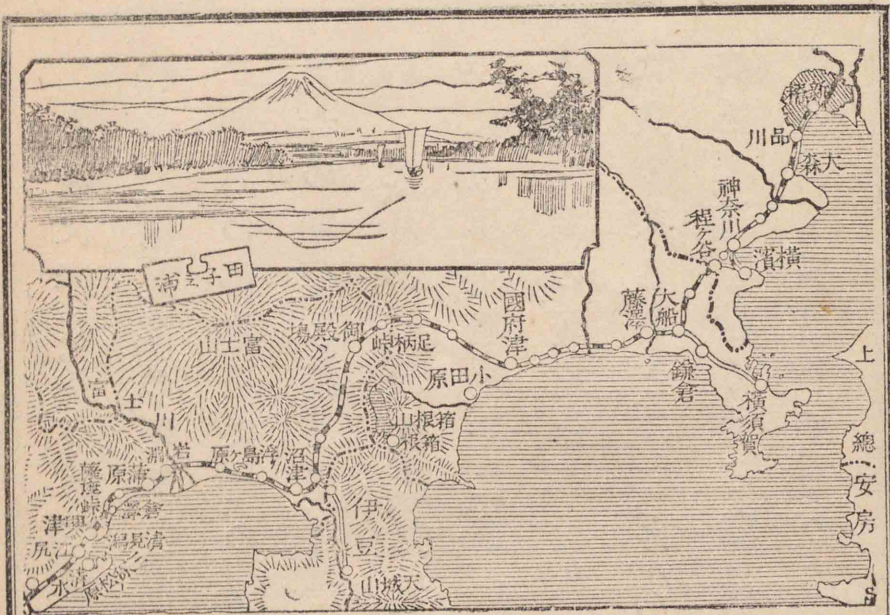
再訂中等國語讀本卷二

一、汽車の旅

九月一日、午前十一時過ぐる頃、新橋より、汽車に乗りて、出發す。折しも、初秋の事なれば、品川、大森の海面、薄霧、たち渡りて、安房、上總の山々も見えず。神奈川、程ヶ谷など、うち過ぎて、はやくも、大船の停車場に着きぬ。こゝは、横須賀の方へも行くべき追分なれば、上下する人、集散する車、殊に、多かり。

藤澤、國府津の邊を走るに、鎌倉、小田原の往事など、懐ひいてられて、史乗も、心に浮び、變遷も、目に見ゆるこゝちす。足柄、箱根は、海道に名高き峻嶺なれど、今は、居ながら、わりのぼりするなど、ひらけ行く世の賜にして、越え難みし古人の紀行も、あらぬ虚言のやうなり。のぼり詰めたるところは、御殿場の停車場なり。このあたりに、承久の難に殉ぜられし、中納言宗行卿の墳墓のありと聞けど、車の窓より、空しく、疎林を眺めたるのみ。

沼津、富士川の邊、富士山、高く、懸り、浮島が原、廣く、横



れり。松風は、源平對陣の古を語るが如く、水聲は、群鳥驚起の昔を答ふるに似たり。懷舊の情、車輪と共に、轉迴して、岩淵、蒲原等の驛路は、いつか、走り過ぎ、汽車は、倉澤の西、薩埵山の隧道に入る、隧道の暗を出づれば、三保の松原、海原と緑を競ひ

て、夕波に浮び、伊豆の天城、青雲と高さを比べて、落日に映じ、清見潟の絶勝は、古今、その奇觀を改めず。

興津の停車場にて、のぼりの汽車を待てる程に、清見寺の鐘響き渡りて、日、全く暮れたり。江尻の海岸を行くに、月いづ。漁火は、月に、光を奪はれて、遠く、有渡の海に漂ひ、汽船は、沖に、烟を残して、近く、清水の港に向ふ。清見潟の廣遠なる景色も、月影と共に、玻璃の小窓に入り來るなど、げに、再び、逢ひがたき佳宵なり。昔、雪舟とて、畫を善くする者ありけり。渡明せし時、晴江觀月の圖を描出して、かの國人の目を驚かししが、爾後、

かの國人の、我が國に來遊する者は、かならず、一度、この地に、筈をとゞめ、自國の瀟湘に比して、愛賞せりとかや。  
(佐々木高行)

## 二、秋四章

### 一、微雨

女郎花咲き、柿の實ほのかに、黄ばみ、甘薯、次第に、甘し。つくつくぼうしは晝に、松蟲、鈴蟲は夜に、共に、秋を語る。粟、稻、蘆の穂の、さわさわと、いふ音を聞け。

微雨、はらはらと、降りて止みぬ。これ、今年の夏の季

を送る聲なり。

二、彼岸

今日は、彼岸の中日なり。近在の老幼男女、藤澤に、鎌倉に寺詣して歸る者、織るが如し。川邊には、鯊を釣る人、多く、並び立てり。

碧潮、川に満ち、日光、空に満ち、百舌鳥の聲、耳に満ちて、風さわやかに、氣清し。

三、黄昏

日は入りぬ。無花果の葉蔭、薄闇くなりて、芙蓉の花も、漸く、凋まむとす。空に、雁聲あり。

月は出でぬ。庭の眞砂、霜の置けるやうに白み、樹影、黒く、地に湧きぬ。

白萩、月に照りて、雪を欺く。

四、暮秋

柿の落葉を踏みて、後山に登る。

黄茅、蕭々として亂れ、龍膽の碧、棘實の紅と、小徑を綴る。

山上より見れば、田は、悉く刈られ、麥の緑、いまだ、ほのかにして、村も瘖せ、晩秋の野、いたく、寂びぬ。

鳥五六羽あり、山上の樹より起ち、鳴き連れて、彼方

の村に向ふ。啞々の聲、滿山に響く。(徳富健次郎著自然と人生)

三、月見に友を招く書

朝夕は、漸く、冷氣を覺え、心地よきかぎりに候ふ。承れば、兄には、當時、箱根の温泉に、御保養のよし、私も、過日來、父と共に、この鎌倉の別荘に出かけ居り候ふ。御承知の如く、明夕は、中秋に候ふが、思へば、一昨年、昨年、兄と共に、さやけき月影を賞せしを、今年にかぎり、その樂を、共にせざるは、いかにも、殘念に存せられ候ふ。高根に上るさやけき影、溪間に映る清き影、さぞ

かしとは存じ候へども、寄せくる波に碎くる影を、白沙青松の間に眺めむも、亦、一興には候はずや。ことに、兄には、近來、和歌に、御熱心のよし、それは、父の、最も、好むところに候ふ。終夜、月下にて、御相手も致さむと、志きりに、待ち上げ居り候ふにつき、是非、御來遊、下されたく候ふ。先は、御案内まで。早々敬具。

四、英雄の心事

徳川家康、武田信玄の死せしよしを聞きて、その家臣に對ひ、「もし、この事、まことならむには、惜むべき事



なり。れよそ、近き世に、信玄ほど、弓箭の道に熟せしものを見ず。われ、若年の頃より、彼の名を聞き、常に、いかにもして、彼の如くならむと思ひて、頻に、みづから、勵みたりき。そのため、益を得たること、實に、少々に、あらず。汝等も、よく、心得られよ。すべて、隣國に強將ある時は、自國にても、これに對して、油斷なく、心を用ゐるが故に、れのづから、國政も治り、武備も撓むことなきものなり。これに反して、隣國、弱き時は、自國にても、れのづから、心弛びて、上下、共に、安佚に流れ、國勢も、從ひて、衰ふるものなり。今、信玄の死せしは、これ、まことに、味

方の不幸にして、よろこぶべきことにあらずと、いひきとぞ。

また、上杉謙信は、その折、越後の春日山に在りて、たまたま、湯漬を食ひ居たりしが、信玄の死せりと聞くと、箸を投げ、食を吐き出して、さてさて、惜しき事かな。近代にて、英雄といふべきは、この人のみなりしを、今は、關東の弓箭柱、無くなりたりとて、はらはらと、涙を落せりとぞ。

その理由は異れりといへども、敵將の死を惜むといふは、共に、一なり。英雄の心事、まことに、符節を合す

るが如きものあり。

五、ビスマルクの幼時

世に、英雄と呼ばれ、豪傑と稱せらるゝ人々の言行は、往々にして、その常軌を脱し、まゝ、常人の付り知り難きものあり。されば、世の人は、それら、英雄豪傑の士の偉業を見る毎に、皆、これをもて、その人の天稟の才に歸して、深く、その由る所を究めず、かへつて、吾人の、到底、企て及ぶべき所にあらずと、思ひ諦むるが多し。こは、まことに、思はぬことの、甚しきものといはざる

オーストリア人、スルツ  
ハスレネー  
生し、  
オーストリア  
國、ヒル  
ク

べからず。蓋し、英雄豪傑の士の、その才、常人に超えたるは、その天稟に出でたる所もあるべけれど、かゝる人々が、その志を達して、英名を、世に轟すに至るまでには、皆、幾多の辛酸を嘗め、幾多の勉強を積み、始めて、然りしものにて、その苦心の迹、また、頗る、常人に過ぎたるものあるなり。これ、まことに、われらの、心を留めて、學ぶべき點なりとす。

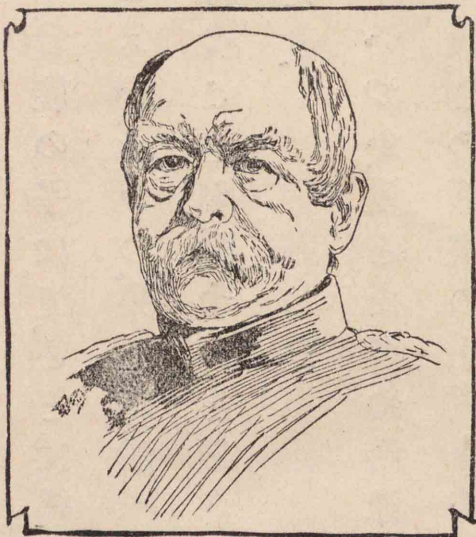
ビスマルクの如きは、その、最も、よき一例なるべし。世の人は、皆、いへり、彼の學校にありし間は、少しも、讀書したることなく、たゞ、擊劍、争鬪のたぐひをのみ勵

み、稍長ずるに及びては、乘馬に耽り、喫煙に淫したるに、その壯年に及びて、漸く、志を得、遂に、獨逸帝國創立の偉勳を建てたるもの、これ、皆、風雲の變と、彼が天稟の偉才とに因れり」と。これ、まことに、ビスマルクを知らざるものの言のみ。

ビスマルクは、獨逸の片田舎なる一貴族の家にうまれたりしが、その家庭は、頗る、嚴格にして、彼は、いとけなき頃より、決して、他の貴族の子弟のごとき、優長なる生活を許されざりき。六歳に達せし時、母は、彼を、國都伯林に送りて、某博士の家塾に入學せしめたり。

スバルタ流の教育  
ハゲンニヤリキ

その家塾は、全く、スバルタ流の教育にて、體操の外に、游泳の課目もありて、過激なるまでに、體育を行へり。



塾生は、毎朝六時に起き出で、七時には、教場に入らざるべからず。朝食は、もとより、午餐、晚餐、いづれも、粗末なる物のみなり。志かのみならず、我が膳に供へられたる食物を餘す時には、これを食ひ盡すまでは、皿を捧げて、卓前に立たざるべからずとい

ふ制裁さへありき。

嚴格なる家庭に、生長せりとは聞きしかどもとよ  
り、貴族の子にて、ことに、纔に、六歳の童なれば、塾長は、  
ビスマルクの、果して、耐へ得るや否やを疑ひしが、彼  
は、すこしも、臆することなく、よく、塾生の體面を保ち  
たり。

いつか、夏となりぬ。游泳の始るべき時は來りぬ。塾  
生は、この新來の小童を苦めむとて、樂みて、その日の  
來るを待てり。游泳所と定められたる、河の兩岸には、  
塾生と教師と、相並び立てり。すべて、新しき生徒は、一

たび、教師より、水中に投げ入れられ、河の中には、また、  
多くの塾生ありて、これを苦め、以て、水に慣れしむる  
を、例とせり。ビスマルクの、一たび、河中に投ぜらるゝ  
や、深く、水中に沈みて、再び、その影を示さざりしが、志  
ばらくして、彼は、前岸近く、現れ、悠然として、岸に上れ  
り。人々、相顧みて、詞なく、皆、その大膽なるに驚けりと  
か。これより、ビスマルクの名、塾中に高く、彼は、遂に、一  
方の首領として、仰がるゝに至れり。

粗暴にして、體力强きものは、多くは、學業に拙きも  
のなり。さるを、ビスマルクは、教場に入りて、また、その

聰慧なること、往々、儕輩を壓して、教師を感歎せしめたり。ことに、彼は、世界歴史を好み、希臘、羅馬の古英雄の傳記は、最も、その愛讀せしものにして、消えかゝれる殘燈の下に、ひとり、史書を繙いて、様々の空想に耽り、得々として、夜の更くるをも知らざりしこと、殆ど、連夜なりきといふ。

十七歳の時、ある中學に轉じて、こゝにて、學士ボンチルといふ歴史科教師の信用を博し、朝に夕に、その居を訪りて、深く、歴史の研究に、心を委ね、孜々として、少しも、怠らず、平生の粗暴なるに似ず、書に對しては、

常に、寢食を忘れたり。思へば、これ、まことに、彼が一世の偉業を大成せし基にして、その事に當りて、裁決、流るゝが如く、奇策、縱横にして、その用意の周到なる、自信の鞏固なる、皆、これ、歴史研究の賜なりといはざるべからず。世に、天稟の才といふこと、無きにはあらねど、琢かずば、玉も、瓦礫に等しからむ。ビスマルクが、我を折り、節を屈して、讀書に勉めたりし一事は、われらの、深く、鑑みるべきことにあらずや。

後年、彼が、國政に任じ、遂に、奧太利と、戦端を開きて、旬日の間に、城下の盟をなさしめ、勳威、赫々として、伯

林に凱旋せるや、舊師ボンチルは、當時、伯林中學の校長なりしが、この報に接して、欣喜措く能はず、直に、ビスマルクを訪ひ、辭をあらためて、その偉勳を稱揚し、「閣下よ、閣下は、嘗て、その愛讀せられたる、世界歴史の中に、けふは、みづから、壯快なる一節を記入せられしにあらずや」といへば、ビスマルクは、深く、その舊恩を謝し、靜に答へて、「否、先生の讚言は、われの當る所にあらず。されど、多年の素志、こゝに、遂げて、歴史研究の實を擧ぐることを得たり」といへりとぞ。多年、薰陶に従事せし、舊師の喜は、如何。また、みづから、素志を遂げし

ビスマルクの愉快は、如何。聞くわれらまで、心の動くを禁ずること、能はざるなり。

六、亞米利加行の話

このたびの航海は、なにしろ、海外へのはじめての航海で、殊に、その乗船である威臨丸といふは、當時でこそ、立派な軍艦であつたけれど、今日から見れば、まことに、ちひさなもので、それに、石炭は、たゞ、港の出入に焚くばかりで、航海中は、すべて、風に依頼する外はないといふ様を始末であつたから、一行の人々も、何

となく、たぼつかない様な氣が志た。かくて、萬延元年の正月に、いよいよ品川沖を出帆して、まづ浦賀に寄り、それから航路を北へ取つて、次第次第に、太平洋へと乗りだした。

ところが、毎日の暴風雨で、乗込員の困難といふものは、それは、それは、何ともいひ様がない。船は、非常に傾き、甲板の上にある舢舨船は、激浪の爲に洗ひ去られ、今にも沈没しはせぬかと思つたことも、幾度であつたか知れぬ。志かし、幸にも、一行、恙なく、漸く、三十七日目に、サンフランシスコに到着することが出来た。

港に着くといふと、亞米利加人は、すぐ、やつて来て、さまざまに、歓迎するのみか、その手當の懇篤なこと、まことに、至れり盡せりと、いふべきほどであつた。やがて、上陸して、諸所に案内せられ、製造場、機械場など、所謂、文明の利器の、活潑な應用を參觀したが、これらの事は、多少、書物の上で、讀んで居たから、その盛況に、感心は志たものの、あまり、驚きも志なかつたが、唯、はじめに見、はじめて聞いて、驚いたのは、その衣食住の風尚の、甚しい相違であつた。

ある日の事、一行は、サンフランシスコの市から、招

待を受けた。行くと、やがて、ホテルへ案内せられた。ところだが、こちらは、萬事不慣で、まあ、あの馬車の様なものでも、はじめて、見た時には、頗る、驚いた。車があつて、馬が附いて居るから、乗物といふことは分りさうなものだが、それが、なかなか、何とも、考が付かない。すると、戸をあけて、こちらへはいれといふ。ともかくもと、はいつて見ると、やがて、車は、勢よく、驅けだす。なるほど、これは、馬が挽く車かと察した様な始末である。それから、ホテルに着いて、上へあがると、いつばいに、毛氈を敷き詰めてある。その毛氈というたら、日本では、

よほど、贅澤なもので、一寸四方、いくらだとかいうて、珍重する品である。それを、十疊も、二十疊もあらうといふ、おそろしい広い室内に敷き詰めて、その上を、平氣で、靴で歩いて居る。われわれは、大小をさして、麻裏草履を穿いて居たが、このまゝ、この上を歩くのはと、一時、ためらうたが、皆が、靴で、平氣で歩いて居るから、こちらにも、草履のまゝで、まづ、上つた。すぐ、酒が出る。徳利の口をあけると、おそろしい音が志た。變なことだと思つたが、これが、即ち、シンバンである。すると、盃のなかには、何か、浮いて居る物がある。分らないも、無理



のないこととて、三四月の暖氣の時節に、これが、氷であらうとは、とても、思ひも寄らぬ話である。ともかくもと、一口、飲んで、更に、コップに浮いて居るものを、口中に入れたが、一同、皆、その冷たさに驚いて、吐き出した。ところが、あとで、やつと、氷といふ事が分つて、大笑を志たといふやうな態であつた。

まあ、かういふことは、かす限なく、あらはれて来て、日本を出るまでは、あつばれ、天下獨歩、眼中、人なしと、威張つて居た磊落書生のわれわれも、こゝに至つて、意氣頓に、銷沈して、かうしたら笑はれはすまいか、か

いとどやうな書

うしたら、恥にはなりはすまいかと、ひたすら、行儀をのみ慎んで、戦々兢兢として居たので、なかなか、苦しいとも、をかしいとも、いひ様がないほどであつた。(福

澤諭吉著福翁自傳)

### 七、外國人の勤勉

余、英京倫敦にありし時、東京の一友人の許へ、書信を贈りき。その中、かの國の人の動作を記して、「よく働き、よく遊ぶ」と、いひしが、今、歸り來て、かれとこれとを比較するに、更に、その差の甚しきものあるを感じ

たり。

かの國の人は、日々、職務に従事するに、豫め、時刻を定め置き、その時至れば、場にのぼりて、拮据勉強、また、餘念あることなし。かくて、退散の時刻を報ずれば、猶豫することなく、机を蓋ひ、手を洗ひて、家にかへる。かくて、直に、服を脱ぎ更へ、外出するを例とするが、いづこへ行くかと思れば、園池に赴きて、釣を垂るゝもあり。河流に出でて、扁舟を浮ぶるもあり。或は、車を走らするもあれば、馬に乗るもあり。或は、芝生の上に、球を擲つもあれば、舞樂場に入りて、樂器を弄ぶもあり。或

カク  
カク  
カク

トモ  
トモ  
トモ

オキ  
オキ  
オキ

は、朋友をたづぬるもあれば、親戚をねとづるゝもあり。かく、十分、遊び暮して後、家に歸りて、晚餐を喫するなど、出入動止、時刻のさだめありて、一屈一伸、一弛一張、すべて、そのよろしきに適せり。尤も、出入の時刻、動止の寛嚴は、社會の貴賤と、職業の高卑とによりて、同じからず。かの、工場に出でて、日々、賃銀を得るものは、晴雨、寒暑を問はず、就業の時限、九時間、乃至、十時間にして、通例、朝七時に始めて、夕の五時、又は、六時に止む。その規程の整へる、その約束の行はるゝ、實に、賞すべきなり。

今、わが國人の事を執るを見るに、更に、時間の規程を踐むことなく、その勤むべき時につとめず、憩ふべき時にいこはず、懶惰遲鈍、不規不正なること、朝野都鄙を問はず、士農工商を論ぜず、大約、一轍なり。そのうち最も、甚しきを、職人とす。彼等は、その工場に臨むや、火を焚き、煙草を喫みて、容易に、着手せず。その業に就くと雖も、遲鈍にして、戯るゝが如く、空談雜話、徒に、時刻を消し、約に背きて、恥とせず。かの「染職の明後日」といふ諺あるも、亦、宜なり。さて、又、家に歸ると雖も、勞を慰め、身を樂ましむることを知らず。或は、飲食を恣に

し、或は、睡眠を不規則にして、攝養の法をだに省みず。かの朋友をたづね、親戚をねとづるゝが如き、高尙なる樂に至りては、また、問ふべき限にあらざるなり。

抑も、箇人にありては、出入、度なく、動止、時なしと雖も、小事に似たり。されど、これを、一都府、又は、全國にしては、その利害、甚だ、大なり。かの西人が、一國の貧富、盛衰を卜するに、人口の多寡を以てするは、これ、人多ければ、業も、また、盛なるによるなり。さはいへ、人少くとよもく、働かば、一人にて、三人の業を營み得べく、人多くとも、怠らば、三人を合はせて、一人の功に及ばざる

べし。されば、わが國の如きは、いまだ、人口の多きを以て、誇るべからざるなり。(大鳥圭介)

八、クルプ鐵工場 その一

西曆一千八百七十七年九月二日、獨逸皇帝ウ、ルヘルム陛下は、皇太子フリードリヒ、カール殿下を從へさせられ、モルトケ將軍以下の高官に供奉せられて、エ、センなるクルプ鐵工場に、行幸あり。正門は、左右に開かれ、新に、造られたるアーチは、綠葉、參差として、車駕を迎へまつり、場内千百の烟突は、高く、半空に聳え

て、汽烟、そこに、瑞雲を現ずるが如く、數かぎりなき鐵槌は、勇ましき響に音立てて、君が萬歳を唱ふるに似たり。車駕、やがて、近づきしが、鹵簿の盛なるは、工場の偉大なると相對して、壯觀、實に、いふばかりなく、工場主の名譽は、遠く、國外にまで、響き渡れり。

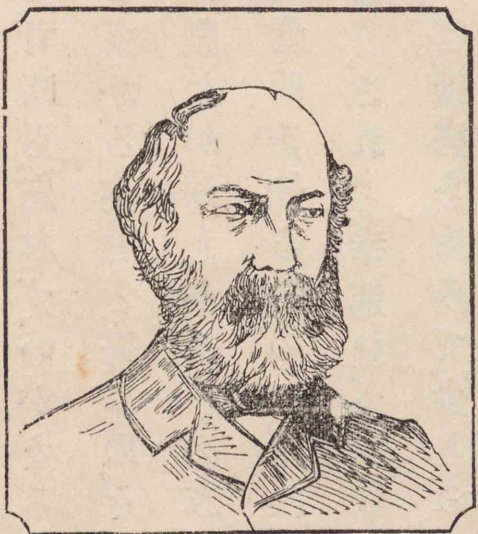
嗚呼、この大工場は、いかにして、成立し、その工場主は、いかにして、かゝる名譽を荷ふに至りたるか。われらは、そこに、その工場主クルプ氏が、數十年の慘憺たる歴史の籠れるものあるを見て、偏に、その苦心の迹と、その成功の偉勳とを懷はざるを得ざるなり。

今の工場主なる、アルフレド、クルプ氏は、そのはじめ、一の小工場を、フリードリヒ、クルプ氏は、そのはじめ、一の小工場を、そこに、建設して、鑄鐵の業に従事せしが、それより、數十年の間、金力を竭し、勞力を盡して、ひたすらに、その研究を攻め、あらゆる辛酸を嘗め盡して、漸く、その鑄鐵の一新法を發明することを得たり。されど、これが爲に、收益の増加したるにはあらず。生活は、益、困難に、心身の勞苦は、舊にも増して甚しく、かくて、遂に、空しく、志を齎して、この世を去れり。

アルフレドは、この時、漸く、十四歳に達せしばかり

抱イテ

にて、まさに、中學校の第三年生なりしなり。不幸なる、この少年は、こゝに、學校を退學せざるべからざるに



至れり。今や、彼は、工場の一職工として、みづから、その間に立ち混りて、その技術を磨き、以て、他日、工場主たるべき素養をなさざるべからざる境

遇に立ちぬ。晨に起きては、工場なる槌聲烈火の間に、その身を置き、夜は、また、嚴格なる母の膝下において、

業務の上の課程を習ひぬ。かくて、この少年の脳裏には、いかにもして、父の志を繼がむとの念、深く、刻まれて、寸時も、忘れず、いかなる勞苦をも、決して、辭することなかるべしと、誓ひぬ。その折の、少年の勞働の、いかに、劇しかりしか、又、その志の、いかに、牢かりしかは、彼の當時を知るものの、常に、驚歎して、措かざるところなり。されど、幸運は、なほ、彼の頭上に向ひ來らざりき。損害、損害を生みて、少しの利益もなく、たゞ、増し行くものは、負債の額のみなりき。少年の志は、かくても、奪ふべからず。誠實にだに働かば、その目的の達せらる

る時、いかでか、なかるべきとの念は、益、固くなりぬ。

精勵の効、空しからず、彼は、遂に、一種の精巧なる鑄鐵を製出せり。かくて、それを、英國に輸出して、少からぬ利益を得たりければ、乃ち、新工場を起せり。勇ましき鐵槌の音、工場内に満ちて、烟突より吐き出す煙は、凄じく、彼は、漸く、たのしき生活を營むことを得たるのみならず、伯林の工藝展覽會より、その出品に對して、金牌を授與せられぬ。

### 九、クルプ、鐵工場 その二

さるほどに、再度の不幸は、彼の頭上に落ちぬ。そのころ、引き續きて起れる、國內一般の不景氣は、殊に、その影響を、國內の商工業者の上にたよぼし、彼の工場も、また、その禍を受けぬ。當時の、彼の困難は、まことに、いふばかりなく、彼は、その家において、すべての銀製の器具を賣り拂ひて、纔に、職工等の飢渴を防ぎしほどなりき。彼は、これより、長く、銀製の器具を用ゐることなく、後年、志を得て、富貴、王公を凌ぐに至りし後、決して、これを購入せざりきとぞ。

彼は、一般鑄鐵の外、更に、精巧なる大砲を製造せむ

として、さまざまに、心を碎きしが、遂に、一千八百四十七年に至りて、その鑄鐵を以て、精巧なる三ポンド砲を製出せり。その大砲は、獨逸國砲兵士官の試験によりて、良好なる成績を示したり。ついで、六ポンド砲も、製出せられぬ。又、その次年には、千四百八十貫餘の鐵板を、英國の市場に出せり。こゝに於いて、世界の工業界は、彼を賞揚すること、甚しく、クルプの名、一時に、世に、高くなれり。

又、その製出したる大砲は、わが本國の軍隊に採用せられて、普墺戰爭、たよび、普佛戰爭に、その偉功をあ

らはししかば、各國皆争うて、これを注文し來り、その製造高は、年を追うて、非常なる額に上れり。かくて、工場は、益増築せられ、製造の用具も、また、幾多の改良進歩を経て、よく、二萬六千貫餘の大鐵板をも製出するに至れり。

嗚呼、山間の一小工場は、かくの如くにして、今や、世界の一大工場となりぬ。

一〇、余が劍術の修業

余の若き時、眞に、修業せしものは、劍術のみなり。余

が家は、もと、劍術の家柄なりしかば、父も、特に、それを奨勵せり。余が師は、島田虎之助といふ先生なり。この先生、余に向ひて、當時、世間に行はるゝ劍術は、たゞ、形式ばかりなり。折角、稽古せむと思はば、眞正の劍術を稽古すべし」と、いはれぬ。余、その言に感じ、遂に、その塾に寄宿して、薪水の勞を執りつゝ、修業せり。

さて、寒中になる毎に、先生の指圖に従ひ、毎日、稽古の終るを待ち、王子權現に行きて、夜稽古をなせり。何時も、まづ、拜殿の礎石に、腰を懸けて、瞑目沈思、心膽を練磨し、また、起ちて、木劍を振り廻し、かくすること、夜



明まで五六回、さて後、歸りきて、直に、朝稽古に取りかかれり。はじめのほどは、樹木森々たる社内のならひ、吹き來る風の音も、何となく、凄しく、覺えず、身の毛も、よだちたりしが、修業の積むに従ひて、次第に慣れ、後には、かへつて、寂しき中に、また、一種の趣味を感ずるやうになれり。

尤も、時々、二、三の同門生の來りしこともありき。されど、いつも、寒さと眠さとに辟易して、中途より、近傍の農家に行きて、寝たりしが、余のみは、一度も、さることせざりき。思へば、その時は、足袋も穿かねば、羽

オソル

織も着ず、たゞ、稽古衣一枚なりしかど、寒さといふことなどは、いかなることなるか、殆ど、知らざりき。今、この老年になりても、身體、すこやかに、根氣も強きは、全く、この時の修業の餘慶なり。今の若き人々よ、暇あらば、劍術は、必ず、修業すべきなり。(勝安芳)

おろ

一一、勸學 (高崎正風)

あだにすごすな、 けふの日を、  
 今日、は再び、 かへり來ず、  
 むだに暮すな、 このとしを、

今年はまたも、めぐり來ず。  
たゞ時の間の、日影だに、  
惜みし人も、あるものを、  
まなびの庭に、つどふ子よ、  
撓まず摘めや、をしへ草。」

一一、一壺千金

古人の語に、「中流失舟、一壺千金」といへることあり。急なるをり、身の危き事を免るべきものあらむには、その物は賤しくとも、その効用に就きては、千金の價

も、貴きものにはあらざるべし。

いつの頃にかありけむ、東都の大火に、老若男女、四方に逃げ迷ひける折しも、夜嵐、強くして、火層は、雨の脚よりも繁く、濃き煙、渦巻きて、面を向くべきやうもなかりけり。爰に、一人の男、百兩の金を手にして、逃げるが、また、一人の男の、一枚の夜具を、頭に被りて、逃げ行くを見て、羨しくや思ひけむ、「その夜具、買はむ」といひかくなれば、「幾何の價にか買ふ」と問ふ。百兩に買はむ」といへば、「然らば、賣り申さむ」とて、夜具を渡し、百兩の金を引き攫み、兩人、先を争うて、逃げたりしが、夜具

持てる男は、これにて、よく、煙と火屑とを防ぎつゝ、逃げ延びたれど、百兩の金持てる男は、煙に捲き籠められて、息もつかれず、そのまま斃れて、遂に、茶毘一片の煙となりきとぞ。夜具一枚のかほりに、百兩を吝まざりしは、よく、生命を惜みしものにやあらむ。(細川潤次郎著な、しぐさ)

一三、貨幣

この世の、いまだ、大に、開けざりし時代には、人々、その、みづから、用ゐて餘ある物品を以て、他の希望する

物品と交換して、纔に、その用を辨じたりき。

されど、こゝに、漁夫ありて、米を得むと思ひて、魚を携へて、近隣の農夫を訪ねたりとせむに、農夫、もし、魚を希望せずして、織物を希望すとせば、漁夫は、更に、織物を有する人を訪ねて、まづ、これと交換し、その織物を携へ、再び、農夫を訪ねて、米と交換せざるべからず。もし、不幸にして、織物を有するものをたづね得ずば、漁夫は、また、更に、所々に、奔走して、魚を希望する他の農夫をたづぬる外、なかるべし。かくの如き困難、あに、人の堪ふることならむや。

されば、人智漸く進むに隨ひて、人の一般に、希望する物品を以て、他の物品と交換する時は、人の容易に受取るべきことをさとり、遂に、それを以て、すべて、物品と物品とを交換する場合の媒介となすに至れり。この媒介物は、即ち、貨幣なり。

昔は、貨幣に、牛羊や、五穀や、皮革や、布帛や、貝殻など、種々なる物品をもちゐしことあれども、今日、文明諸國にては、一般に、貨幣として、金銀をもちゐることとなれり。わが國、今日の貨幣は、金貨、銀貨、白銅貨、青銅貨の四種なり。その内、金貨を以て、本位貨幣とし、銀貨、白

金貨は五圓、拾圓、百圓、千圓、三種あり

銅貨、青銅貨を、補助貨幣とす。(坪内雄藏)

一四、國民の義務

人民の國家に對して、爲さざるべからざる役は、納税と兵役との二者を、最大なりとす。

れよそ、一國の獨立を保つに缺くべからざるものは、立法、行政、司法の三衙門なり。海陸軍なり。教育なり。鐵道、航海、電信、驛遞なり。他國との交際なり。民業の獎勵補助なり。これらを辨ずる費用は、國民の租税より他に、頼るべきものあらず。また、國民よりいふ時は、政

明治及前記の上記  
 司法 行政 立法  
 裁判官 官吏 議員  
 官職 官位  
 武官 武官  
 司法 行政 立法  
 裁判官 官吏 議員  
 官職 官位  
 武官 武官

府に、かくの如き設なき時は、たのれの生命財産を、安全に、すること能はず。たのれの智徳を發達せしむること能はず。外國人の侵掠を防ぐこと能はず。他人より、枉屈を受けたる時、これを雪ぐこと能はず。災害を被りたる時、救助を受くること能はず。通信、運搬を、迅速安全に、すること能はず。故に、たのれが得たる所の利益中の幾分を出して、政府の費用に供するは、國民たるものの、當然なる務にして、古今、東西を、かけて、變ずること無きなり。

租税に二種あり。一を直税といひ、一を間税といふ。

直税 自己ノ財産及  
 收入ニ依リテ自  
 己ノ納ムル税  
 間税 自己ノ財産及  
 收入ニ依リテ自  
 己ノ納ムル税  
 國税 一地方ノ所  
 有ニ依リテ納  
 ムル税  
 地方税 一地方ノ所  
 有ニ依リテ納  
 ムル税  
 町税 一地方ノ所  
 有ニ依リテ納  
 ムル税

直税とは、直に、その人より納むるものにして、間税とは、國民が、日々、用ゐる所の物産の上に課するものなり。さて、また、これを、國税と地方税とに分てり。國税は、全國の用に供するものにして、地方税は、一地方の用に供するものなり。又、他國より輸入する物に課するを、輸入税といふ。

次に、人民の安寧を保ち、國家の獨立を護らむには、一日も、軍備、無かるべからず。これ、兵役の生ずる所以にして、その國民、みづから、任ずるにあらずば、誰か、これに任ぜむ。昔は、兵役を、武士のみの役目とせしかど

も、今日は、四民同一の負擔となりたれば、たよそ、生を、この國に稟けたるものは、兵役に服せざるべからざるなり。歐洲諸國にては、獨逸國が、全國皆、兵たるべき制を行ひて、その軍備、最も、整へるにより、わが國も、今は、これに倣へり。

抑も、武威の、盛なる時は、國も、亦、盛に、武威の衰ふる時は、國も、亦、衰ふるは、歴史の、明に、示す所なり。況や、今日、狼貪虎噬の世界に立ちて、國威を墜さざらむとするには、軍備の如きは、ますます、これを、強盛に、せざるべからず。

わが國は、古來、武を以て、國を建てたり。その人民の忠勇なる、萬國無比と稱せらる。これ、今日まで、外侮を受けたることなき所以なり。(西村茂樹)

一五、臺灣日記

十一月一日、午後五時三十分、雲林に達す。この地、曩日の戰のために、兵燹に罹り、土人だに、なほ、住むに、家なし。いはむや、屯兵をや、寺院、もしくは、民屋、多くは、戸なく、板なし。假設の兵舎と稱すれども、檳榔樹と竹とを用ゐて、造りたるものなれば、脆弱にして、且、粗なり。

その兵士の困難と、土人の困難とは、一見人をして、酸鼻せしむ。

十一月二日朝、守備隊長來りて、「この地、土匪潜伏の虞あり。警戒せられよ」といふ。午前七時、出發す。原野田圃の間を過ぎ行くこと二里許、他里霧にて小憩す。この地のある富豪、昨夜、土匪に襲はれたりとのことなれば、その家に行きて聞くに、「土匪十餘人來りて、戶外より、金をいだせよといふに、牢く、戸を鎖して、應ぜざりしかば、果は、屋上に登りて、屋瓦を破り、石炭油に、火を點じて、寢室の上に瀉ぎ、危険、いふべからず。よりて、

サシカケ

セ、以つし

オッ

小憩

薩  
鑛

止むを得ず、金若干を與へて、漸く、去らしめたり」とて、

涙を 拂ひ つ、 語れ り。土 匪の、 富豪 を襲

ふもの、大概、この類なり。もし、金なければ、主人、又は、愛

兒等を奪ひ去る。その去るに臨みて、金何百圓を、幾日までに、何處まで、携へ來れ。期を誤らば殺さむのみ」と、いひ遺すを例とすといふ。

十一月三日、正午、曾文溪村に至る。頗る、要害の地なれども、戸數、僅に、二十餘戸、屋宇、みな、狭く、かつ、壁落ち、屋破れ、纔に、雨露を凌ぐのみ。本日は、天長節なり。各舍を巡り見るに、屯兵は、紙を、赤く、染めて、櫻花を造り、又は、紙にて、旭旗を造りて、青竹につけ、戶外の庭上に樹てて、以て、祝意を表するなど、忠君の情、感ずるにあまりあり。

十一月四日、旅團司令部にいたり、まづ、第一に、去年十月、北白川宮殿下が、御病臥あそばされし御寢室に、案内を乞ふ。比志島旅團長、自ら、導く。司令部の左方の一室に、注連繩を張り、「北白川宮殿下御寢所」と記したる札あり。錠をひらきて入れば、二間四方の室、二間あり。その奥の間に、ふるき御寢臺あり。殿下が、御危篤まで、臥させられたりしものなり。その次の間に、竹製の檐架一箇あり。これぞ、御病中、嘉義地方より進ませ給ひし途次、召されたりしものなる。殿下は、檐架中に、毛布をうちかづきて、臥させられながら、九十度、九十五



度の暑さに、細き村道をたどらせ給ひ、折々、參謀を召させられて、重き御頭をもたげて、戦況を聞き召され、それぞれ、御指揮あそばされつゝ、進ませ給ひしよし、嘗て、木村軍醫監の話に聞きしが、今、そのことを思ひいでて、こを拜するに、涙、落ちきて、とゞまらず。たゞ、無言にて退きぬ。

十一月七日、早起、旅装を整へ、午前八時、鳳山に達す。あだかもよし、こゝに駐在せる第七第九兩中隊は、今朝、土匪討伐のために、出發せむとするところなり。余は、志ばし、舍外の空地に立ちて、そを見送れり。この兵

去年來、渡臺したるもの半、また、近く、交代し來れるもの半なり。昨年より留れるものは、いづれも、炎熱とマラリヤとのために、顔色青く、肉落ちてあり。余は、一見して、わが同胞が、新領地を保護するに、かくまで、辛苦するかと、そゝろに、悲しく、この實況を、内地の人にも、見せまほしく覺えたり。この際、最も、心に感じたるは、兵士の食饌なり。中隊長の言に、「今日は、特に、食饌を盛にして、出陣を祝へり」と、いふ。その食饌を見れば、飯の外に、牛肉と芋との煮付一種、魚と野菜との煮付一種、ジャボン一切、香の物四切なり。即ち、通常の午飯に比ぶ

戻り出しアアム  
モウナウ

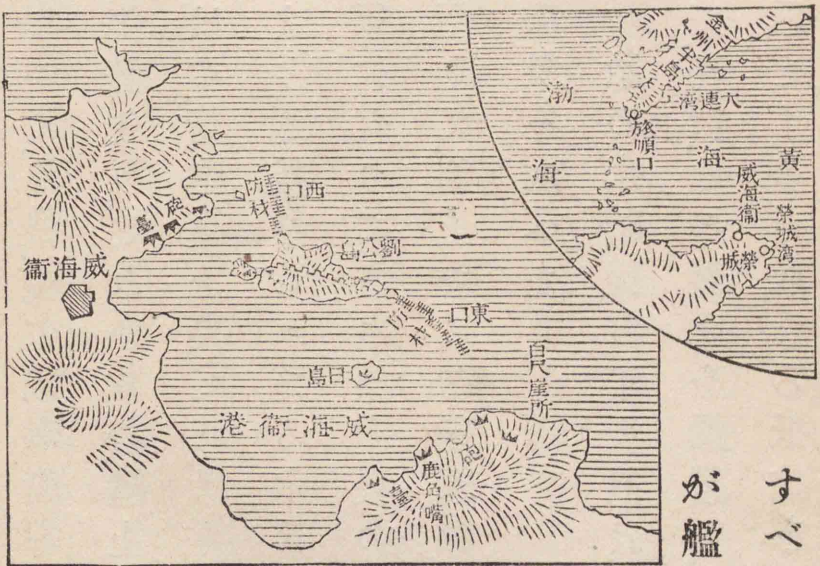
れば、たゞ、一種の煮魚と、ジャボン一切とを増加せしのみなり。土匪討伐に赴くや、いつも、負傷者なきはなく、又、いつも、劇烈なるマラリヤに冒されざるはなし。この行、その災は、誰も誰も、期するところ、志かして、その出陣を祝へる食饌は、かくの如し。この日記を讀まむ人は、こゝに、一滴の涙を濺ぐも、可ならむ。(石黒忠恵)

一六、威海衛の陥落その一

我が海軍は、敵の艦隊を、黄海に破り、陸軍も、また、旅順口を陥れ、金州半島、悉く、我が手に落ちたり。敵艦は、

退いて、なほ、纔に、威海衛を保てり。我が軍、更に、進みて、海陸より、これを攻む。陸上の敵兵、遂に、支ふること能はず、諸砲臺を棄てて、悉く、潰走せり。我が海軍の諸艦より、選拔せられたる水兵五十餘名は、直に、上陸し、陸軍に代りて、各占領砲臺の守備に任じ、その備砲を應用して、海上なる帝國艦隊と相應じ、劉公島に向つて、砲撃を加へたり。

敵の水師提督丁汝昌は、この四面重圍の中にありて、巧に、その艦隊を操縦し、よく、掌大の孤島を守りて、屈せず、益、勇敢なる抵抗を持続したり。殊に、港口には、



すべて、防材を敷設したれば、我が艦隊も進むに由なく、まづ、それを破壊せむとて、二月

三日の夜、六號水雷艇を、威海衛の東口に進航せしめたり。敵の哨艇たる七隻の水雷艇は、直に、我が艇の潜行を發見し、四方より、これを圍みて、砲丸を雨射せしのみなら

ず、日島砲臺よりは、速射砲を發ちて、頻に、これを妨げたり。されど、我が艇員は、自若として、驚かず、四邊を凝視し、遂に、防材の一端にわいて、航路を發見し、密に、その内に入り、三たび、擲爆薬を使用し、防材の一部を破壊して歸れり。

伊東司令長官、この報を得て、大に、喜び、第一、第二、第三の各水雷艇隊の司令を、旗艦松島に召集せり。やがて、余は、今、諸君に命ずるに、港内に突入して、敵艦を撃沈すべきことを以てす。抑も、水雷艇の、港灣に突入するは、各國海軍の、いまだ、嘗て、試みたることなき者に

して、實に、難中の難事たり。願くは、諸君、一命を、國家に捧げて、帝國海軍の名を、世界に耀されよと、いふ。司令等は、快く、これを諾し、艇に歸りて、悉く、書信を焼き、衣服を更めて、靜に、夜の更くるを待てり。

五日、午前三時、月落ち、海暗きに乗じて、第二、第三の水雷艇隊十隻は、徐々として、東口に進み、防材を越ゆるに及び、急に、全速力を出して、港内に進入せり。港口なる敵の哨艇は、早くも、それと知りて、火箭をうちあげけるが、そを見て、敵の各艦、皆、水雷防禦の用意をなせり。

敵の旗艦定遠にては、丁汝昌、その參謀と共に、艦橋に出でて、暗中を透して、四方を望み居しが、我が艇隊の近づくを見て、志きりに、榴霰彈を發ち、また、機砲を發てり。こゝに、我が艇隊の一隻は、艦首の方より、二隻は、艦尾の左右より、まつしぐらに、突進して、早くも、數百メートルの近距離に薄れり。この時、一彈は、我が九號艇に命中し、一團の汽煙、闇を破りて、上騰せり。されども、數秒時を出でざるに、轟然たる響と共に、定遠の艦體、劇しく、震動し、瀑の如き水柱、空中に迸りて、艦上にそゞぎかゝれり。これ、まさしく、我が一發の魚形水

雷、その艦底に命中して爆發したるなり。艦員は、防水扉を閉鎖せむとして、縦横に、馳せ廻り、必死となりて、防禦に努めたれど、渦巻く潮水は、艙口より迸り出て、下甲板の浸水、既に、一尺に達し、艦體、遂に、傾斜し始めぬ。丁汝昌は、はや、これまでなりと思ひて、急に、錨を抜いて、淺瀬に乗り上げしめ、乗員をして、悉く、上陸せしめたり。あゝ、清國無雙の堅艦として、武威を、東洋に振ひ、黃海の戦には、我が本隊にあたり、威海衛にありても、また、防禦の中心となりて、屢、我が軍を惱したる定遠も、遂には、かなき最後を遂ぐるに至れり。

我が軍は、この勢に乗じて、第二の攻撃を企て、五日の夜、第一艇隊の五隻、東口より闖入せむと志たるが、敵の警戒、嚴なれば、まづ、第二、第三艇隊をして、ことさら、西口より突入する状を示さしめ、六日、午前四時、月の落つるを待ちて、靜に、防材附近に達せり。敵は、昨夜の攻撃に懲り、頻に、電氣燈を旋回して、海面を照し、各艦、かはるがはる、發砲して、相警戒せり。我が艇隊は、一時、悉く、防材に乗り上げしが、漸く、港内に入り、奮戦して、水雷を發射し、遂に、來遠、威遠、寶筏の三隻を擊沈し、各艇、一兵をも損せずして、恙なく、本隊に還れり。

一七、威海衛の陥落その二

我が水雷艇隊奏効の結果、伊東司令長官は、總艦隊を擧げて、二つに分ち、敵軍を攻撃せむとす。

二月七日の早朝、戦闘の號音と共に、各艦の大檣頭には、開戦を示せる大軍艦旗を掲げしかば、兵員は、これを見て、皆、その部署に就けり。滿艦、肅然として、一人の言語を交ふるものなく、たゞ、波浪を蹴る轉輪の轟々たる響を聞くのみ。

やがて、劉公島に向へる我が本隊、六千メートルの

閃光  
イナヒカリノ  
カクカスル

砲煙  
イナヒカリノ  
カクカスル

距離に近づくや、敵の砲臺、まづ、發砲し、我も、また、頻に、猛撃を加へたり。砲臺は、忽ち、黄煙に包まれて、着弾處處に、爆發し、閃光、四邊を射て、壯快、いふべからず。日島に向へる一隊も、また、直に、戦を開き、陸上の我が軍も、百尺崖附近の各占領砲臺より、日島を砲撃せり。

鎮遠以下の敵艦は、頻に、發砲して、砲臺を助け、兩軍の砲聲、殷々として、海陸一面、硝煙の中に没し、日光、ために、朦朧たり。さるほどに、日島の火藥庫、我が砲彈を受けて、爆發し、その砲臺は、遂に、また、用ゐること、能はざるに至れり。

九日、敵艦靖遠、我が占領砲臺の一なる、鹿角嘴砲臺より發てる彈丸のために、遂に、沈没せり。志かのみならず、この日、敵兵、みづから、なかば、沈没せる定遠を破壊するなど、また、戦ふ意なきを見て、丁汝昌、憂慮、措く能はず、心中、大に、決するところありきといふ。

この時、劉公島にありし敵の陸兵は、海軍營に迫り、軍艦を奪ひて、逃走せむことを企て、水兵も、また、既に、士官の命を拒みて、その任務を勤めず、島中の混亂、實に、名狀すべからず。こゝに、艦隊の諸將校、こもごも、提督の室に行き、全艦隊の水兵、離叛して、用ゐること、能

はざるを訴ふ。丁汝昌、即ち、一歐人を遣し、兵士等に向ひて、「汝等、須らく、最後の、一快戦を試み、刀折れ、彈盡きて後に、敵に降るべし」と、いはしむ。されども、兵士等、遂に、命を奉ぜず。

十二日、午前八時三十分、清國砲艦鎮北は、白旗を前檣に掲げ、港口を出でて、我が本隊に近づき、軍使、廣丙艦長程璧光、我が旗艦松島に至りて、丁提督の書を、伊東司令長官に呈せり。その書に、

汝昌、はじめ、艦破れ、人盡くるまで、決戦せむと思ひしかど、今や、空しく、百千の生靈を奪ふに忍びず。殘

艦、たよび、砲臺を、貴軍に獻じて、降を乞ふ。願くは、兵士と人民とをして、生を完うして、各、その郷に歸らしめむことを。

とあり。伊東司令長官は、快く、その降を容れ、更に、酒菓を、軍使に託して、これを、丁提督に贈り、その苦戦の勞を慰む。

十三日、程璧光、喪服を著けて、再び、來り、我が司令長官に謁し、悄然として、提督は、閣下の情誼に感泣し、事既に、足れりとなし、總兵劉步蟾、統領張文宣と共に、藥を仰ぎて、節に殉ぜり」と、いふ。我が將士、これを聞きて、

情誼(ヨナヤケ)

皆、その義烈に感じ、涕泣せざるものなし。伊東司令長官は、特に、命じて、儀式の外は、奏樂を禁じ、以て、弔意を表せり。

十七日、我が總艦隊は、悉く、威海衛港内に入り、收容軍艦を合せて四十餘隻、いづれも、旭旗を翻し、旗艦松島に起れる、嚟亮たる君が代の奏樂に和して、各艦の兵士、一齊に、萬歳を呼ぶこと三回、山雲、ために、裂け、海波、亦、ために、起たむとせり。(小笠原長生著帝國海軍史論)

一八、海外の一知己



一夕、勝海舟翁を氷川邸に訪ひました。ところが、話は、たまたま、丁汝昌のことに及びましたが、翁は、口を開かれて、

丁汝昌は、われが、海外の一知己であつたが、日清戦争の時に、とうとう、自殺して去まうた。當時、われは、今昔の感に堪へず、病氣を推して、こんな文章を書きかけた。

二十八年二月十二日、丁汝昌、その率ゐるところの軍艦に、降旗を掲げて、われに降るといふ。ある人、その可否得失を論じて、余が意見を問ふ。余、思ふ旨ありて、答へず。その後、兩三日、丁は、いよいよ、降るべき順序を了へて、自盡して、死せりといふ。余、彼の心中を思ひ、嘆息、措くこと能はず。思へば、彼が、我が國に來りし時、余が家を尋ねきて、共に、相語りき。

こゝまで書いたところが、胸中の感慨と、病餘の衰弱とで、頭痛が去だしたものだから、止むを得ず、それなりにしたが、今、そのつゞきを、口で話さう。

その時、丁が、支那、當時の海軍に就いていふには、今日、我が國の海軍は、いかにも、見所がなく、御はづかし、次第だが、拙者は、唯、將來に、期する所があつて、聊か、

李氏の海軍史  
貴著の海軍史  
細い字で書かれた  
海軍史の事

みづから奮勵して居るばかりだ。拙者は曾て、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて、英國へ留學し、同國の士官に就いて、少しく海軍の事を學び、歸朝の上、この二百名の生徒と共に、やうやう今日の海軍を創設したけれども、これは、只、兒戯に過ぎない。その事は、李氏も承知と見えて、今日の海軍は、何の役にも立たない、たゞ、今後、十年を期して、大成すべきのだと、常々、われわれに、云うて居る。拙者は、曾て、貴著海軍歴史を讀んで、君が、幕末から、王政維新の際にかけて、海軍を經營せられた閱歷と偉勳とを承知し、拙者が、今日の



境遇に比べて、志きりに、敬慕致して居る」と、いうた。丁

のいふところは、その語は、甚だ、謙遜で、その望は、甚だ、遠大であるから、それ、感心して、海外に、一知己を得たのを喜び、いろいろ、こなたの考をも話した。

その後、軍艦に招かれ、提督の禮で待遇せら

れ、いろいろ、丁寧な響應を受けたが、われは、一首の和歌を、一口の寶劍に添へて、彼に贈つた。そして、艦内、残る限なく、見物したが、一體の事が、なかなか、整頓して、日常用ゐる品などは、一つも、外國製のを用ゐず、支那製ばかりであつた所などは、實に、感心したよ。今後も、總べて、かゝる心がけが、肝要であるというたら、彼は、よく、聽き入れた。

われと、丁との間には、こんな關係があるものだから、日清戦争の時分には、思は、始終、北洋艦隊の上に馳せて、敵ながらも、その消息が、氣にかゝつた。また、あの

（關係）

時の聯合艦隊の司令長官であつた伊東中將も、昔、神戸で、われの塾に居た緣故から、一生一度ともいふべき晴の舞臺に上つたからは、どうか、日本海軍の名譽と、一身の手柄とを立てさせたいと思つて、當時、われの胸は、あちらを思ひ、こちらを思ひ、殆ど、千々に、碎けたよ。

然るに、威海衛の海戦は、敵味方とも、このうへない名譽を耀し、世界の海戦史上に、ひと花咲かせたと聞いて、われは、實に、嬉しかつた。伊東中將の事は、いはぬ。丁が、あの時の處置は、實に、一點の非難すべき所もな

く、海戦上に、一箇の新事例を教へたというてよい。陸戦の時、あの様な場合に處する例は、これまで、いくらもあつたけれど、世界に、海戦といふ程の海戦が、昔からなく、従うて、あんな場合も、少かつたから、これに處する方法の如きも、倣ふべき先例がなかつた。丁の處置は、實に、戰鬥力を失うた艦長が取るべき、模範を示したばかりでなく、蕭條たる海戦史の秋の野に、一點の紅花を點じたのだ。

たよそ、人間が、何事にか、激した時には、死ぬには、譯もない事だらう。志かし、よくよく、事局の前後を達觀

絶望(オチノキ)

して、十分に、善後の策を立て、然る後、從容として、死に就くは、決して、容易の事ではあるまい。丁汝昌の境遇の如きは、部下には、數年來、苦心養成した所の、他日、支那海軍の要素たるべき、かの二百名の秀才があり、傍には、いろいろ、面倒な事をいひ出す雇外人があり、是等の處置をつけねばならぬ。むしろ、斃るゝまで、奮戦しようかといふと、かの二百名の秀才を殺さなければならぬ。それでは降参しようかといふと、自分の良心は、どうしても、許さない。そこで、丁は、沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも立て、且は、雇外人

犠牲(他) アハレム

への義理から、一身と軍艦とを犠牲にして、顧みなかつたのだ。その心の中は、實に、憫むべきではないか。というて、翁は、涙ぐまれた。その話のあとを聞きたくも思ひましたが、日も、全く、暮れたことゆゑ、暇乞して、歸途に就きました。(勝海舟談話筆記)

一九、艦上より人に報ずる書

遠征以來、殊に、勇壯に、勤務罷りあり候へば、憚ながら、御心配下さるまじく候ふ。御贈りくだされ候ふ送從軍の詩數首、深く、感心致し候ふ。昨夕も、これを吟じ

ながら、甲板に歩し候ひて、秋天万里、大月、霜に照り、皇旗は、高く、敵砲臺に翻り、わが兵の劔影、斜に、灣水に映ずるを見、男兒一生の愉快は、實に、この間の氣持にあることと存じ候ひき。

小生が命ぜられて、日々、乗り廻し居る船は、四十噸程のものにて、即ち、敵の手中より捕獲したる水雷艇に、御座候ふ。

東亞百年の平和を定むるが、わが、抑もの大目的に候へば、このたびの戦は、百戦中の一戦に、だも、値せざる、小鬪と存じ候ふ。要するに、早晚、歐洲列國と、世界の

大戰場に相見えむことは、勢の止むを得ざるところなりとの決心、今や、軍人一般の脳髓に充たされ居り候ふ。希くは、東西大洋上に在いて、一度、前後に無き大快戦を経たるうへ、凱旋の大軍歌を聞きて斃れたく存じ候ふ。

御懇なる御示の大義は、小生斃るゝまで、決して忘は致さず候ふ。

今日までの戦況は、必ず、新聞紙上にて、御承知の御事と存じ候ふ間、別に、詳報仕らず候ふ。頓首。(平原文三郎)

私に致す御示は、大いに道徳

ハハシキ御示

二〇、瀬戸内海

淡路の島より、馬關に至るまでの間、内海、波靜にして、一面の青疊を敷きたるが如く、大小の島嶼、その間に點綴して、風光、畫けるが如し。世に、瀬戸内海といふは、これなり。

その形、東西に長く、南北に狭く、長さ、およそ、百二十里、幅、一里半より十五里に及べり。北には、中國の山系、蜿蜒として、山陰、山陽兩道の界に横り、南には、四國の山系、連綿として、四國の中央を劃せり。そのむかしは、今の中國と四國と、陸地によりて、相聯絡せしものをな

上志  
吉世  
中志  
新所  
瀬戸内海  
山系  
蜿蜒  
四國

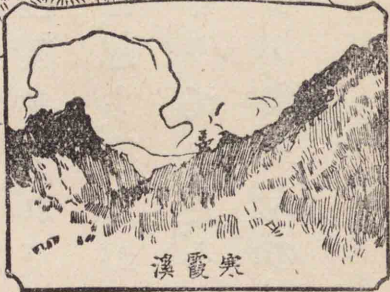
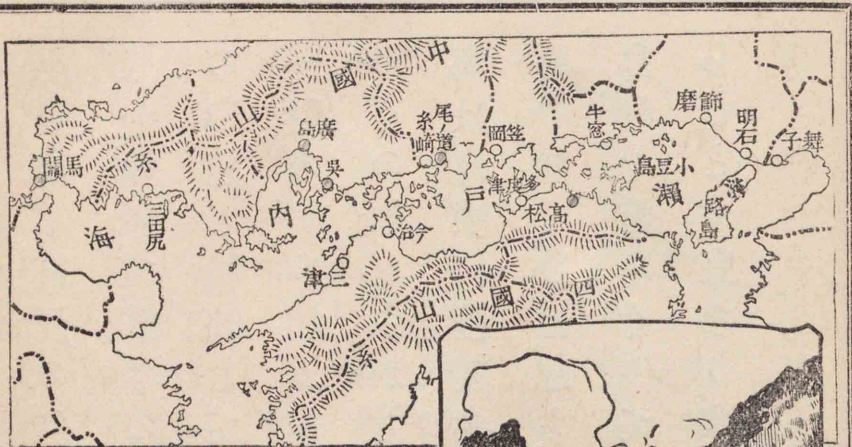
りしを、海水の侵蝕、地下の變遷によりて、いつか、相分離して、中間の陸地は、全く、海中に陥落し、かくて、こゝに、瀬戸内なる多島海を化成するに至りしなりといへり。まかして、その島嶼、及び、沿岸の岩石は、多く、花崗岩より成れり。

春霞、淡路の島を籠むるころとなれば、一望の島山、あはく、空中に消え、島裡の麥浪は、青々として、海浪と相接し、農家漁屋、その間に隠見して、その風景、まことに、いふべからず。やがて、東南風の季節となれば、風は、四國中央の山系にさゝへられて、その餘波のみ、かす

シヒコム

中

夏、季節



かに、來り、海面は、ゆるく、細紋を生じて、夜は、又、氷の如き月輪の、その間に躍り出づるなど、月色の大觀、こゝならで、はた、いづこにか、もとめむ。漸くにして、秋氣、長空に満ち、風霜、島山の花崗岩を侵せば、楓樹は、錦を、溪谷に織り、いだして、島際の風煙、まことに、染むるに似たり。ことに、

月煙(風景)

尾道、小豆島、松島、明石、磨師

小豆島、寒霞溪の紅葉を以て、まされりとす。秋も、いつしか、過ぎて、嚴冬の節となれば、降雪の白色は、花崗岩の白色と相映じて、ますます、その光を添へ、風趣、更に、一段の美を加ふ。春夏秋冬、その風光の盡きざること、かくの如し。去かして、一たび、舟を、この間に遣らむか、海は、島嶼に圍繞せられて、波浪の靜なること、恰も、鏡面の如く、路は、忽ち、窮るが如くにして、忽ち、また、開き、島、轉じ、海、めぐりて、また、その盡くるところを知らざらむとす。宜なり、歐米人の、これを激賞して、世界の絶勝と呼ぶや。(志賀重昂著日本風景論)

二一、土地と植物

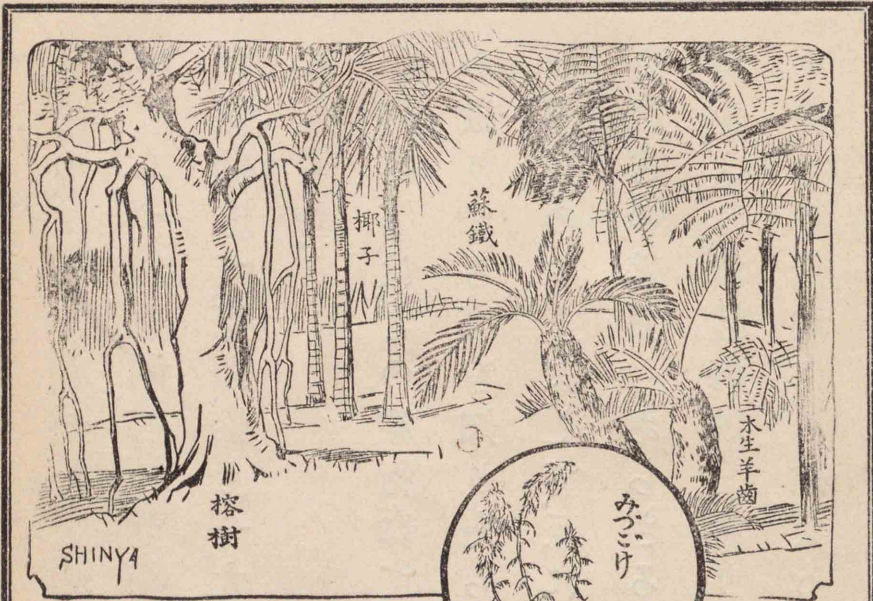
御身等、汽車に乗りて、長き旅行を試みよ、到るところ、山送り、水迎へ、原野ゆき、森林來りて、その景色の、異なるものあるを覺えむ。こは、山容水態、自然の地形に基くは、固よりなれど、また、そこに生ふる草木が、さまざまの趣を添ふるにも由るものなり。

今、東京より、直江津行の汽車に乗り、武藏、上野の平野を過ぎ、高崎に至りて、左に折れ、妙義の山の麓に沿ひ、横川の驛に達せむか、この間のながめ、東京附近と、



更に、かはるところなく、別に、目を惹くものもなからむ。されど、その驛より、齒輪軌道により、碓氷の嶺をのぼり、輕井澤に至らむか、氣候の、にはかに、變ると共に、野生植物のありさま、又大に、その趣を、ことにせむ。ことに、盛夏の候、野に、原に、百花の咲き亂るゝなど、他の低地にては、到底、見るべからざる光景を呈するものあらむ。

さて、これより、更に、道を換へて、下野なる日光山に遊び見よ、東照宮の廟あたりは、老杉、枝を交へて、晝もなほ、暗きに、馬返にいたり、急阪を攀ぢ、中禪寺に達せ



むか、湖畔、一帶の山腹には、落葉木多くして、その若葉の時の如き、緑滴らむとすともいふべからむ。又、男體山に登らむか、白根山の麓に至らむか、樅、落葉松等の針葉樹の密林、暗黒鬱蒼として、遠きところよりも、猶、それと、認め得らるべ

赤沼厚(植物) 4丈(厚) 厚(厚)

きなり。また、赤沼が原などには、水蘚ミヅカの生ひ茂れるのみならず、高原固有の草花は、ほく、夏時に至れば、一時に、花開きて、原頭、恰も、一大花苑の現れたるがごとき思あらむ。

御身等は、この旅行にて、各地の植物の、たのづから、かはりある事を知りたむ。されど、猶、これらの地方は、本邦の中土にして、互に、相距ること遠からざれば、さほどの差異もあらざるなり。更に、船に乗り、北の方、奥羽より、津輕海峽を渡りて、北海道に入らむか、本邦中央部の低地に、普通なる草木、并に、固有の竹類を見

九花(花) (花)

自然(自) (生)

ず、却つて、中央部の山地に自生する、草木の、一般平原に生ふるを見るならむ。猶、北行して、千島群島に至らむか、植物帯、全く、變りて、寒地固有の風景を現し、一木一草、皆、目なれざる心ちするも、奇といはば、また、奇といふべからむ。さて、更に、行を轉じて、本邦西南部に向ひ、中國より、四國を経て、九州に入らむか、植物帯のありさま、全く、前とかはり、暖地固有の植物、即ち、肉桂、樟、榕樹、楊梅の類のみ、多からむ。これより、南の方、琉球諸島に至らむか、芭蕉、蘇鐵の類、ことによく、生ひ立ち、猶、南の方、臺灣に至らむか、椰子、木生羊齒の類、生ひ茂り、

風光殆ど、熱地植物帶のありさまを現すを見む。

かく、北の方、千島の寒地植物帶より、南の方、臺灣の熱地植物帶にいたるまで、その發生をほしいまゝにするは、わが版圖の南北に延長して、廣袤數千里、氣候風土地によりて、大に、かはればなり。御身等、北の方に生まれたるか、南の方に行きて、その有様を見よ。御身等、南の方に生まれたるか、北の方に行きて、その景色を見よ。その差異、實に、こゝに、陳べたるものには限らざるべきなり。(三好學著植物學講義)

植物が、  
果つて、  
南緯  
風土及土地、  
持子

二二、 寶石

寶石の中にて、最も、優れたるものを、金剛石となす。指輪、衣服等のさまざまの修飾に用ゐられて、その價、或は、萬金を超ゆるものあり。亦かも、その大さは、僅に、大豆ほどに過ぎず。その高價なること、まことに、驚くに堪へたり。金剛石は、たゞ、打ち見たるのみにては、すこしも、玻璃と異なることなけれど、一度、これを、日光にさらさむか、又は、燈火にさし附けむか、そこに、わそろしき光を發して、人をして、眼くらましめむ。この光は、即ち、この寶石の命ともいふべきものなり。されど、金

子

剛石の價値は、ひとり、この光澤のみであらで、また、その質の、頗る、硬きにあり。いかなる硬き金屬と雖も、金剛石を以てすれば、容易に、これを切ることを得べく、その利、まことに、金を斷つともいふべきなり。されば、この物は、修飾の寶石として、珍重せらるゝ外に、また、硬き物質を切磨する利器として、あまねく、使用せらる。現に、玻璃商の如きは、皆、これによりて、自在に、玻璃板を切り放しつゝ、あるなり。

金剛石に次ぎて、價値あるものを、紅色のルビーとす。その他、サフ、ヤ、トッパズ等の如きも、また、寶石の中

44キル

トッパズヤルビー

ルビー

に入るべきものなり。オパールに至りては、その價格、大に、下りて、寶石の最下流に位す。

寶石は、ひとり、その外見の美しく、その價格の高きが爲のみにあらず、また、その物質の上より、わが自然界の、特殊なる産物として、すこぶる、珍重すべきものなり。科學者は、これを「土の花」と呼びて、彼の、美しき植物の花に比せり。まことに、植物の花びらが、その葉、根、幹をば組成せる物質と、れなじものより、成り立てるが如く、寶石も、また、かの陶器となり、煉瓦となる、そのれなじ土塊によりて、組成せられたるものなり。こと

科學者  
形ノモノ  
ソノハ  
ハナハ  
ナリ

に、金剛石は、全く、石炭と、その質を同じく、せり。たゞ、いかなる力により、いかなる理由によりて、かゝる美しき物體に化成したるかといふことに就きては、今日、なほ、不明の事に屬して、われらは、こゝに、その説明を與ふること、能はざるなり。

金剛石を、酸素の中に入れて、これを熱する時は、全く、燃え盡して、炭酸に變ず。これ、その、炭素より成れること、明なり。されば、この理を推して、人工にて、金剛石を造り出し得べしとの説は、一時、歐洲の學者の間に、行はれて、はては、さまざまに、工夫を凝して、その製造

ヤット

わが  
岩積  
多クナル

カレハカリ

を努めたるものも少からざりき。かくて、纔に、その目的を達し得たるものも無きにはあらざりしが、出來あがりしは、まことに、小き一片にして、その價值少く、また、その費用は、眞の金剛石を求むる價よりも嵩みたりければ、その企も、遂に、已みたり。

金剛石は、地球上の一小部に於いてのみ、産出せらるゝものにして、眞の產地として數ふべきは、唯、僅に、ブラジル、東印度、南亞非利加の一部に過ぎず。かくて、大抵、山岳の、最も堅く、最も舊き岩石の層中に混入せらるゝを、常とす。金剛石探掘者は、これらの岩石の崩

洗滌する

壊せる所に就きて、岩石の破片をあつめ、これを河水にて洗滌し、かくて、その中に、金剛石のありやなしやを試験して、そこにはじめて、これを發見するなり。されど、この寶石は、常に、たやすく、その中に發見せらるべきものにあらず。その一小塊を發見するまでには、探掘者は、實に、幾度かの徒勞を費さざるべからざるなり。

金剛石の大なるものに至りては、その高價なること、まことに、驚くべきほどにして、現に、今、露西亞帝室の所有に屬せる大金剛石の如きは、その昔、同國商人

五、切大、精

の、これを、東印度より買ひ來りし時にても、實に、八十萬圓の、多額なる金貨を支拂ひしものなりとか。

### 二三、獅子

獅子は、亞非利加、南亞米利加、及び、亞細亞の一部に産する猛獸にして、身の丈、三四尺、長さは、九尺に及ぶものあり。毛は、柔にして、黃褐色を帯び、牡には、雄大なる鬣あり。常に、深山幽谷の中に穴居し、そこにて、その子を養へり。

子獅子の生まれたる時は、恰も、稍、生長したる猫の

写本

如きものにして、母の脊に乗り、尾にまつはりなどして、戯れあそぶ。牝獅子は、よく、この子獅子をはごくみて、はじめの間は、少しも、その側を離れず。水を飲まむが爲に、外出する外には、絶えて、その穴の外に出づることなしといふ。かゝる必要の上よりして、その穴は、大抵、泉のほとりに營みてあり。

牡獅子は、また、その間、よく、一家の食物に注意し、夜に入れば、直に、外に出てて、その食物を求む。まづ、靜に、森林の叢中を潛りぬけて、泉のほとりに出て、そこに、樹蔭を求めて、身を潛む。こは、他の動物の、水を飲まむ

が爲に、泉のほとりに寄り來るをば、急に、襲はむとなり。かくて、その耳を歛てて、動物等の近づき來る足音を聞き居るが、かなたより、一群の羚羊などの近づき來るや、彼は、身をひそめ、地に伏して、炬の如き、眼光をかゝやかしつゝ、徐に、身がまへする、その姿態は、まことに、英風颯爽として、當るべからざる趣あり。かくて、そこにさまよひ來れる、これらの羚羊等は、十中の八九まで、その竦手を逃るゝこと能はざるなり。されど、彼も、また、さる好機會にのみ、遭遇し得べきにあらず。時としては、家族への土産は、もとより、われみづか

らの食料をすら得難きことあり。かゝる時には、彼は、森林を離れ、人里近くあらはれ、人家に進入して、不意に、その家畜を襲ふことあり。

このあたりの牧場は、恰も、城塞の如く、堅固に造られ、その周囲には、人の身長二倍ほどもあらむかと思はるゝばかりなる、高き屏を設け、また、その中には、強犬を置きて、これを守れり。されど、すべての防禦も、この猛獸に對ひては、殆ど、その効力をなきなり。彼のわろしき一聲、近く、屋外に響くや、羊は、うち慄ひて驅け出し、小牛、馬の如きも、小屋の中に狂ひ回りて、夙く、そ

の正氣を失へり。獵犬は、猛き聲に吠え立てつゝも、やがて、番小屋の中に逃げ込めり。まして、番小屋にある番人等は、いかにせむやうもあるべからず。たけりりたけりたる獅子は、今や、一層の勇氣を増し、わろしき勢を以て、一躍して、その、高き屏を飛び超え、あはやといふ間もあらせず、小牛、または、馬を擔うて、ふたゝび、高き屏を飛び超えつゝ、悠然として、家路に向ふさま、わろしとも、いさましとも、形容すべきことばなし。かくて、わが穴に歸り著くや、優しくも、その獲物をば、わが牝獅子に與へて、その食ひ了らざる間は、われ



は、決して、これに觸るゝことなしといふ。子獅子の生長する間は、牡獅子は、特に、その牝獅子にやさしくして、いかなる勞苦をも、いかなる危険をも、敢てすることとを辭せずとぞ。

子獅子は、はじめの間は、母の乳によりて生育す。かくて、三月ばかりも経れば、漸く、穴の外に出て、飛び、又は、跳りなどして、戯れ遊ぶ。やがて、行歩も、自由になるにつれて、親獅子は、これに、その獲物を與へて、これを取り扱ふことを學ばしむ。はじめは、なかば、死したる獲物を與へて、これを嚙ましめ、後には、全く、生きて

るものをもてきて與ふ。やがては、これを伴うて、共に、林中に入り、まづ、兎の如き小動物を捕ふることを教ふ。かくて、遂に、羚羊を捕へ、牛馬を襲ふことを教ふるなり。

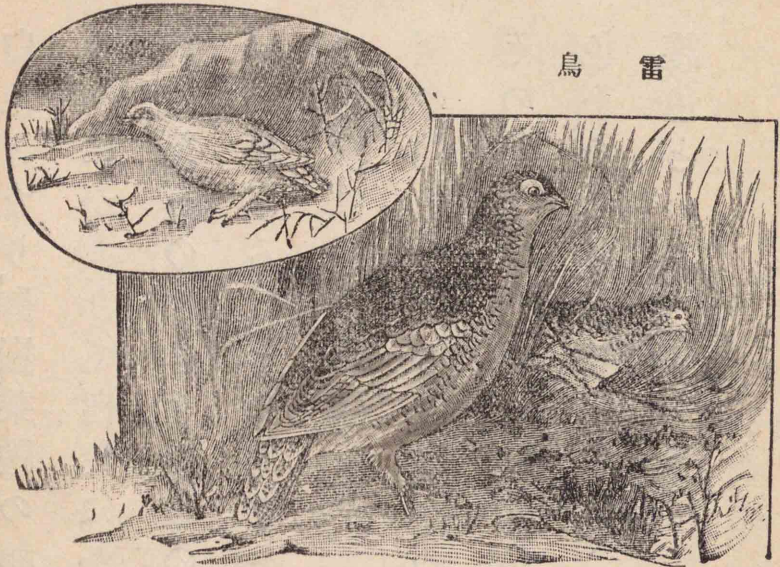
子獅子は、一年を経れば、恰も、犬のごとき大さとなり、三年を経れば、牡は、漸く、この猛獸の自負するに足るべき、美事なる鬣を生ず。かくて、七八年の後に至りて、はじめて、獸王として、はづかしからぬ、完全なる發育に達するなり。

二四、動物の保護色

動物の彩色は、なにか、特別のいはれあるにあらざるかぎりには、まづ、その住居する周囲の彩色に似るを、例とするなり。こは、他の動物の攻撃を免かるゝ爲に、たよりよきのみならず、たのれより進みて、他の動物を攻撃するにも、たよりよければなり。例へば、草木に著き居る昆蟲の、その、常に、葉に居るものは、綠色にして、その、幹に居るものは、褐色を帯ぶるが如し。すべて、北極地方に住む動物は、白色を帯び、沙漠地方に住む動物は、褐色を帯び、熱帯地方の、常に、綠色なる林中に

タヨリヨキ(便利ヨキ)

雷鳥



住む動物は、多く、綠色を帯ぶ。かくて、同じ北極地方にても、終歲、雪あるところに住む動物は、四時、白色なれども、夏時、雪消ゆる土地に住む動物は、たゞ、冬のみ、白色にかはるなり。北極狐、北極兎の如き、これなり。わが國にても、北部の、雪多きところに住む兎は、冬期、必ず、

白色となり、御嶽、乘鞍の如き深山に住む雷鳥は、冬期のみにかぎりて、白色にかはるも、皆同じいはれなり。彼の尺蠖の如き、その數の多き割合に、われわれの目に觸れざるは、そのありさまのよく、棲息するところの樹木に似たればなり。ことに、雨蛙の如きは、その周圍の物色の變る毎に、その體色を變ふること甚しく、その葉上にある時は、綠色をなし、幹上にある時は、褐色をなせり。動物學者は、これらを名づけて、動物の保護色といふ。

二五、 諭言五則

鹿の兒あり。母に隨ひて、出でて遊ぶ。騎して、弓を手にし、矢を負へる者に遭ふ。母の曰く、「汝、かの肩上にある物を知るか。飛びきて、身にあたる時は、必ず、死せむ。汝、急に、これを避けよ」と。鹿の兒、首を振りて曰く、「兒は、その飛び來る、果して、何の状をなすかを試みむ」とて、母の去るにも去らず、遂に、矢にあたりて死せり。世には、頑にして、教に従ふことを知らざる、往々、かくの如きものあり。

一小猴、人の髭を剃るを見て、刀を偷み、これに擬し

偷 (ハナハシ) (ヒゲ) (カサネ) (カサネ) (カサネ)

物の習はす後スヤ

脂肪 (ヤニ)

阿母 (アハ)

欄 (ラン)

栗鼠 (リス) 胡桃 (カシ) 毒 (ドク) 美 (ミ) 外 (ウチ) 内 (ウチ) 充實 (チウジツ) 昂 (オウ) 屈 (クツ) 未熟 (ミジュク) 那珂通高 (ナカトウカウ)

て、みづから、その鼻を傷く。世の、習はずして、事に従ふもの、多くは、この類なり。

一貧兒あり。菌を探りて歸り、その母に誇りて曰く、「阿母の探るところは、常に醜し。兒はその蓋の、眞珠の如くにして、その欄の、脂肪の如くなるものを獲たり」と。母、これを見て、嘆じて曰く、「これ、毒ありて、食ふに堪へざるものなり。兒、それを誡めよ。外、美なるものは、その中、たほく、毒を含むものなること、ひとり、この菌のみにあらず」と。

栗鼠、樹を攀ぢて、胡桃を摘み、その皮を噛み破り、顰

蹙して曰く、「何ぞ、この苦きや」と。既にして、核に及ぶ。乃ち、笑ひて曰く、「まづ、苦きを喫せずば、安んど、この滋味を得ることあらむ」と。

一農夫あり。兒を携へ、出でて、麥の熟せりや否やを檢す。兒問ひて曰く、「この麥の穂を見るに、或は昂く、或は俯す。いづれか貴き」と。父、二つながら、その穂を抜き、これに喩して曰く、「内、充實すれば、必ず、下る。かの、昂然として、屈すること、知らざるもの、如きは、皆、その、未熟なるによりてなり」と。(那珂通高)

二六、春の朝 (大和田建樹)

一

月影あろく、霞に消え、  
雲雀の歌は、野末に満つ、

今こそ朝よ、急げ里に。

柴賣る少女、花賣る翁、

二

春風やぶる、小蝶の夢、  
朝露あめる、堇の床、

今こそ時よ、急げ野邊に。

菜を摘む少女、木を伐る翁、

三

雲なき空に、日ははや出て、  
色あひはゆる、梢の花、

今こそ春よ、急げ小田に。

耕す牛も、種蒔く子も、

二七、ベルナルド、パリッシー

昔、フランス國に、ベルナルド、パリッシーといふ人ありけり。その父母、甚だ貧しかりければ、さらに、學校の

教育を受けたることなかりき。長じて、ガラスに色  
き、また、土地を測量することを、業と志けれども、妻子  
ある身の、これを以て、生計を立つるには足らざりし  
なり。

當時、フランスの陶器は、粗悪にして、釉薬、栗色なり  
き。パリッシー、これを改良せむとねもふことひさしか  
りしが、一日、イタリーの名工デラの製せる磁器を見  
て、心ますます、これに傾けり。然れども、妻子あるが爲  
に、みづから、イタリーに往きて、その秘を探ることを  
得ざりしかば、自己の考を以て、種々の薬品を求め、白

エッセイ (ウハクシ)

ットメ (ットメ)

モトメ (カハト)

中 (アウラ)  
さらぬだに (アウラ)

色の釉薬と、彩色の薬とを探り出さむことを努めた  
り。誠に、これ、暗夜に、物を見めむとする類にして、あは  
れにも、また、大膽なる事なりけり。

かくて、パリッシーは、竈を築き、土器を買ひ、種々の薬  
品を塗りて、焼き試みることに、多年に及びたれども、試  
験、一も、中らず。さらぬだに、生計、豊ならざりしを、今は、  
試験の費用に追はれて、貧困、已に、迫れり。されば、身、み  
づから、試験の薪炭を買ふこと、能はず、懇意なるガラ  
ス工、又は、瓦工の窯の一隅を借りて、小試験をなすこ  
と、また、多年にして、一も、成らず。

彼は、これがために、毫も心を屈せず。遂に、一の大試験をなさむとて、あるかぎりの錢財をつくして、三百箇餘の土器を求め、藥を塗りて、ガラスの竈に焼くこと、數時間にして、いだし視るに、白色の釉藥、焼き著きたるもの、たゞ、一箇あり。

彼は、既に、成功の緒を得たりと思ひければ、みづから、瓦石を積み、家の傍に、竈を築きしが、七八箇月にして、漸く、成れり。こゝに、彼は、土器の下地を製造し、更に、藥料を塗りて、早朝、これを、竈の中に入れ、火を焚きて、日暮に至りしかど、藥、いまだ、焼き著かず。遂に、再び、

端然  
 形正、初は居  
 ントして居  
 ル

旭の光を見るに至れり。されど、彼は、猶、端然として、竈の前を去らず。その妻、僅ばかりの朝飯を持ち來て與へけるが、彼は、これを食ひつゝ、うちまもりてあるほどに、その日も、亦、空しく、暮れぬ。かくすること、七晝夜にして、遂に、成らず。彼は、面くすぼり、身體疲れ、更に、この世の人とも見えざりき。

パリッシーは、これを、事ともせず、こは、藥料の、なほ、宜しからざるが爲なりとて、更に、工夫を凝しけれども、費用、已に、盡きければ、友人の助を乞ひ、辛うじて、物品を調べ、やがて、又、竈に、火を點ぜり。かくて、藥料の焼き

板屏

著かざる前に、薪はや、盡きぬ。彼は、機を失はじとて、家の板屏をうち毀ちては、投げ入れ、投げ入れ志けり。板屏、已に、盡くれども、薬は、いまだ、著かず。彼は、猶、十分間、火力を保たせむとて、家なる椅子を持ち出でて、投げ入れぬ。まだ、何をがなと看回すに、寢臺の外には、一物も無かりければ、これをも打ち碎きぬ。今よりは、一家の者、いづくに寝ぬ、いづくに眠らむ。妻子は、そのありさまを見て、發狂せしなりと思ひ、泣き號びて、逃げ走れり。然れども、この最後の火力により、白色の釉薬、始めて、焼き著きたり。パリッシーの喜、それ、いかにぞや。

何カナイカトミヨ

才覚(王走)

食客(今)

然れども、この時は、唯、焼き著け得たりといふまでにて、賣品とする程の陶器にあらざりき。されば、彼は、猶、許多の試験を要すれども、今は、才覚、すでに、盡きて、如何とも、志がたくなりぬ。こゝに、酒屋の主人あり、パリッシーが志の撓まざるに感じ、その家に、食客たることを許したり。パリッシーは、これがために、纔に、生命を繋ぐことを得て、毎日、試験に従事すること、半年なりしが、またもや、失敗せり。

パリッシー、みづから、この時の事を語りて曰く、余は、いかなる失敗にも堪へ、いかなる艱難をも、意とせざ



詬罵（ツカシメノシ）

（ヤ）  
（ヨモヤ）

（ヤ）  
（ツカシメノシ）  
（ツカシメノシ）

りしが、唯、堪へ難かりしは、家人の詬罵なりき」と。誠に、終日、勞苦の後、家にかへりて、妻子に慰められ、或は、心合へる友人と、うち語ひてこそ、失敗も慰み、艱難にも堪ふべけれ、出てては、近隣に笑はれ、入りては、家族にはづかしめられ、衣破るれども、綴る人なく、腓の肉は、悉く、落ちて、沓下を著くるに由なく、蓬髮徒跣、悄然として、竈の前に立たざるべからざるパリッシーが心は、そも、いかにありけむ。

志かれども、「精神一到、何事不成」パリッシー、經驗を積むこと、十八年、遂に、精良無類の陶器を造るを得たり。

志かのみならず、畫くところの草木鳥獸までも、一々、寫生して、工夫しければ、その巧妙、また、比類なく、その名、世界に高くなれり。前年、ロンドンにわいて、賣物に出でたるパリッシーの皿は、徑一尺餘にして、價、わが一千六百圓に當れりといふ。また、以て、その貴きを知るに足らむ。（中村正直著西國立志編）

二八、新聞紙の初期

今や、日本全國の新聞紙の總數、一百七十餘、東京のみにて、大小、合すれば、二十餘に達せり。新聞紙は、實

に、社會の耳目にして、一日もこれ無からむか、吾人は、  
舊の如く、又、譬の如くならむ。されど、そは、吾人、今日の  
考にして、四十年前にありては、さる物は、聞くことも、  
見ることも得ざりしなり。

余が父の藏せる太政官日誌の綴の中に、も志ほ草、  
及び、内外新報といふ小冊子、雜れり。聞けば、これらが、  
我が國新聞紙の濫觴なりとか。されど、こは、維新前後  
に、時々、發行したるものにて、新聞紙といはむよりは、  
むしろ、雜誌といふかた、正當ならむ。その、日刊のもの  
のはじめは、英人ブラック氏の發行したる日新眞事誌

太政官(今日(初マ))

濫觴(初マ)

にして、紙數は、僅に、四頁なれど、紙は洋紙を用ゐたり。  
これに次いで起りたるは、横濱新聞なり。つぎに、東京  
日日新聞、つぎに、郵便報知新聞、つぎに、朝野新聞、つぎ  
に、新聞雜誌なり。

日新眞事誌、横濱新聞のことは、姑く措き、今、猶、新聞  
のたもなるものといはるゝ、東京日日新聞も、そのは  
じめは、和紙にて、片面摺なりしかば、その見窄らしき  
こと、恰も、引札に似たり。名高かりし、この新聞紙すら、  
かくの如し。これにて、その他の新聞紙の如きは、大か  
た、想像せらるゝならむ。

見(スホ) (見ニシカリ)

引札(平ラシ) 勢

明治七年の末頃より、東京日日新聞社も、新聞雜誌社も、大に改革をなし、東京日日新聞は、紙幅をひろげ、新聞雜誌は、曙新聞と名を改め、共に、八年一月一日、その初刷を配達することを廣告せり。さるに、活版器械の不完全なる、職工の不熟練なる、いづれも、その日に出來上らず、一月一日の日附のものを、東京日日新聞は、二日の朝に配達し、曙新聞は、二日の夕に配達せり。東京日日新聞は、東京昨日新聞なり、曙新聞は、夕暮新聞なりとは、その當時の笑柄なりしよし、よく、人の語るところなり。輪轉器械を利用する今日より考ふれば、その迂遠なりしこと、實に、驚くべきにあらずや。

笑柄 (笑草)

宿學 (鴻儒) 大 (大)

香氏 (香)

かくて、各社、皆、宿學鴻儒たほく、日々社には、岸田吟香氏あり。報知社には、栗本鋤雲氏あり。朝野社には、成島柳北氏あり。各、一方に、旗幟を樹てて、互に、下らざりしかど、要するに、雜報のみにて、社説といふものあることなく、その雜報も、政治上の事は、憚りて、記載せず。その無味なる、その單調なる、今日の新聞に比ぶべくもあらず。福地櫻痴氏が、日々社に入り、社説を掲げしが、社説といふものの初か。それより、漸次、各新聞の紙上に、政治に關する論説もあらはれ、寄書等も現る、

論説 (寄書) (社説)

に至れり。

今や新聞紙は、大に發達して、殆ど遺憾なし。されど、  
そは、外形の事のみ。その内容に至りては、なほ、飽かぬ  
こと、なきにあらず。今より三十年後の新聞は、三十年  
前より、今の新聞を見るが如く、大に、その面目を革め、  
公平に、忠實に、眞に、社會の耳目たるに反かざるもの  
たらむことを望む。

二九、 塙檢校保己一

塙檢校保己一は、武州兒玉郡保己野村の人なり。群

飽かぬこと(不満足ナリ)  
なほ、飽かぬ  
こと、なきにあらず

面目(表)

書類從五百餘卷を刊刻せるなど、和漢古今、瞽盲の第  
一流に居る人なり。年十四の時、他の瞽者と共に、江戸  
に來りしが、二人とも、便るべき所もなく、九段阪の上  
にて、さめざめと、泣き居たり。時に、内藤安房守、御殿よ  
り退出せられしが、この様子を見て、いたく怪み、駕籠  
脇の侍に、「いかなる譯なるか、尋ね來よ」と、命ず。侍、行き  
て、仔細を問ふに、「我等兩人は、兒玉の者にて、遙々、江戸  
に、修業のため出でたるが、本銀町に、かねて、知る人あ  
りて、尋ねたるに、その人は、今、行方知れずなりぬ。頼む  
樹蔭に雨漏りて、せむ方をければ、又々、故郷へ戻るべ

きかと、談合中なり」と答ふ。侍はその由復命せしに、安房守「それは、不便の至なり。ともかくも、屋敷へ伴へ」とて、連れ歸りて、扶助せられたり。

さて、その一人は、琴を習ひ得て、終に、世に、名人と呼ばるゝ上手になりしが、檢校は、極めて、不器用にて、遊藝など、さまざま、習はせられたれ



ど、なに一つ、覺えず。常に、晝寢のみして、甚だ、怯弱なりしが、唯、書を好むこと甚しく、ことに、よく、百人一首を諳誦せり。安房守、これを聞きて、「さては、彼には、書を聞かせ、歌を詠ますべし」とて、師を擇ひて、教を受けさせしに、果して、上達せり。廿一二の時には、小著述をなししが、その師、これを閲して、「この書、よく、出來たり。されど、その許の才にて、かやうなる瑣事をなすは、甚だ、惜しきことなれば、必ず、なすまじ。更に、思を易へ、一層、大志を企つべし」と、いひければ、檢校、大に、その言に感じ、それより、群書類從、纂輯の念を起したりとぞ。後にい

たりて、番町に、和學所を取り立て、かつ、盲人の總録官となれり。この總録官になりたる人は、必ず、千萬金を蓄へざるものなきに、檢校は、數千金の借財を遺せり。こは、皆、學校の用と、刻書の用とに費ししなりとか。

檢校、極めて、強記にして、一回、讀み聞かせらるれば、記憶して忘れず。常に、和漢の書に通じたる書生、五六人を養ひ置き、群書類從の稿本を寫さしめ、傍、奇書珍書を讀ましめて、それを聞くを、娯と志たりとぞ。會津の藩士、大倉嘉藏といふ人、長く、その家に寓客となりて居たるが、余は、それより聞きしなり。まことに、稀世の

稿本  
下書  
娯  
たし  
し

人物とやいはむ。(喜多村香城著五月雨草紙)

### 三〇、活版の由來

我が國に、活字といふもの出て來てより、著述刊行上に、大なる便益を興へしことなるが、この活字を創めしは、本木昌造といふ人なり。

昌造は、文政七年、長崎新大工町に生まれき。代々、幕府に仕へて、和蘭語の通譯官なりしが、ひろく、西洋の事情を調べ、多く、かなたの書を閱讀するにつれて、その印刷術の精巧なるに感じ、かくの如き術を、我が國

にも起したしと思ひ起ち、或はその理を、洋籍に探り、或はその術を、西洋人に質し、種々工夫を凝しぬ。嘉永四五年の頃、はじめて、流込活字といへるを製造して、自著和蘭通辯を印刷せり。これ、實に我が國鉛製活字版の根元なり。

安政二年、故ありて、獄に下されけるが、鐵窓の下、常に黙坐沈思、みづから造りし活字版の改善を工夫するより外に、また、餘念も無かりきといふ。その赦さるるに及びても、或は、文字を、水牛に彫りて、鉛にうち込み、或は、鋼鐵に刻して、銅にうち込むなど、さまざまの

鐵窓(鐵窓)

黙坐(カヘリテ)

二ルサレ

工夫を凝ししかど、改善の功、擧らざりしかば、暫く、念を、印刷業に絶ちたり。

萬延元年、蒸氣船二隻を、外國より買ひ受け、みづから、その船長となりて、新事業に着手せり。王政維新の際には、飽浦製鐵所に入りて、製鐵の事を掌り、明治二年には、長崎に、私塾を開きしが、月謝も、塾費も、すべて、徴收せぬさだめなりしかば、年々の失費、千圓以上に及びぬ。こゝに於いて、維持費を求むべき必要を生じ、再び、印刷業に、心を傾けたり。

かくて、資金五萬圓を投じて、活字改善業に、心を碎

件活字  
（活字の件）

く折しも、たまたま米國人某が、清國上海にて、巧妙なる鉛製活字を製出せし由を聞きければ、急ぎ人を遣して、視察せしめたれど、深く、その術を秘して、知らしめず。時に、重野安釋氏、上海より、件の活字と、その印刷器械とを買ひ來りて、藏せる由を聞きしかば、更に、人を頼みて、申し込みし末、遂に、これを譲り受けたり。

それより、これを、活字改善の標本として、頗に、工夫を凝したれど、猶意に満たぬところ多かりければ、米國の宣教師フルベッキ氏にはかり、その紹介にて、上海なる活版技師を招聘して、師となし、活版傳習所とい

招聘  
（招きよこす）

昌造  
（昌造）

ふを設け、活字製造、及び、電氣版印刷の業を創めき。これ、實に、わが國活字印刷術完成の端緒なりしなり。

昌造は、一は、この業によりて、窮士族に、産を授けむと欲せしが、種々の困難生じて、事意の如く運ばず。長崎の活版所は、これを、門人某に託せしが、技術の進歩、爾來、大に、見るべきものあるに至れり。

この年、横濱に、毎日新聞發行の舉あり。昌造、これに與り、社員を送りて、同地に、活版工場を起し、新聞印刷に従事せしめたり。事業の、漸く、成功の域に進むや、更に、門人を、東京に出して、印刷局設立の議に與らしめ

議  
（議）



且、下谷泉町に、分工場を開かしめたり。後、この分工場を、築地に移ししが、これ、今の築地活版所なり。

昌造は、かくても、なほ、休息することなく、みづから、工場の監理に勵精せしは、更なり。人を督して、活版材料の改善に、心を勞したること、十年、一日の如くなりしが、明治八年、遂に、郷里にて、みまかりぬ。享年五十二なり。(坪内雄藏)

監理(監督)

享年五十二

三谷昌造

再訂中等國語讀本卷二終



全十册  
定價各卷金廿五錢

明治二十八年十一月十五日再訂改版印刷  
明治二十八年十一月十八日再訂改版發行  
明治二十九年二月十六日再訂第二版印刷  
明治二十九年二月二十日再訂第二版發行

著者 故落 合直文

相續者 落合直幸

補修者 明治書院編輯部

發行者 三樹一平

印刷者 宮本敦

明治三十三年九月二十二日  
文部省檢定  
(中學校國語科用)



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
(特電話本局二四三三八番)  
東京市神田區南乗物町  
(特電話本局八九二番)

明治書院  
明治圖書株式會社

